令和８年度第１回高知県産業振興計画フォローアップ委員会農業部会 議事概要

日時：令和８年 10 月 29 日（木）　14:00～16:00
場所：新来島高知重工ホール　第６多目的室
出席：委員 10 名中、８名が出席
議事：(1) 第５期産業振興計画＜農業分野＞の令和８年度上半期の進捗状況及び強化の方向性について

議事（1）について、県から説明し、意見交換を行った。（主な意見は下記のとおり）
議事については、すべて了承された。

※意見交換概要

（１）第５期産業振興計画＜農業分野＞の令和８年度上半期の進捗状況及び強化の方向性について

（次世代型ハウスの整備について）

（濵田副部会長）

・（建設費用が高騰する現在の状況では、次世代型ハウスに準じる装備を導入する）中古ハウスの再整備にウェイトを置いた方が断然よい。

（平田農業イノベーション推進課長）

・投資が難しい状況で、中古ハウスを活用する方も増えているので、しっかりと支援していく。

（需要に応じた米生産について）

（山下部会員）

・農水省で適正な作付面積を算定したものが各都道府県に割り振られ、高知県農業再生協議会で、主食用米や飼料用米、加工用米の割り振りがされ、地域再生協議会におりていく、といったように体系づけられるとよいのではないか。そうしたことが、生産段階のコスト指標である 20,535 円/60kg 玄米ベースの達成に近づくことになるのではないか。

（濵村農業政策課長）

・平成 30 年以降に、国全体としては生産数量の目標は廃止しており、43 都道府県が独自に設定している。高知県も同様に設定。ただ、国は主食用米の需要見通しのみ公表

していたが、ご指摘のとおり、米価が乱高下の中で、非主食用米についても見通しを出すと報道されている。需給バランスのとれた生産とおっしゃったように、主食用米・非主食用米を併せて、水稲農家の判断で作れるよう支援する。現在、他県に生産数量目標の設定の見直しについてアンケートもとっているところ。その結果、国全体での数量目標の設定が必要となれば、例えば、全国知事会を通して、声を上げていくというようなことも必要かと思う。

（水稲農家への支援について）

（山下部会員）

・飼料用米を作る農家への県の支援があればいい。

（濵村農業政策課長）

・令和９年度からの国の水田活用の支援内容が 11 月頃には示されることになっているが、非主食用米への支援強化に期待をしている。また、令和８年度から始めている水田農業機械導入支援事業についても、来年度飼料用米を生産する農家への支援を拡充する方向で予算協議を進めているところ。

（中山間地における担い手について）

（山下部会員）

・中山間地域では、林業や建設業といった他業種から、副業として農作物をつくりたいとの声が聞かれる。そのようなスモールスタートを支援するということも重要。

（政岡農業担い手支援課長）

・農地を守るという観点からも兼業農家は重要な担い手と認識している。兼業の方も含めて農地を守る仕組みづくりについて、来年度予算化できないか検討しているところ。

（米の収量・品質の向上、高温耐性品種について）

（山下部会員）

・作況の反収指標の予想数量、9 月 25 日時点で高知が 93 で、四国の他 3 県と比べても低い。暑さが関連しているかと思うので、米の高温耐性品種について引き続き試験をお願いしたい。

（久岡部会長）

・高知県の米は収量が低い上に、１等米比率も低い。コストは(他県と)あまり差がないことを考えると、ずいぶんコストの高い米を作っていることになる。これから、

標準的なコスト指標が示されて、それが米価に反映されるならば、品質・収量を上げていかなければならない。

（高田環境農業推進課長）

・本年度の作柄は 93 で、この数字を驚きをもってとらえている。早期米で収量が低下した理由としては、６月に日照時間が短く、穂数が減少したことが大きな原因。また、登熟期間の高温で胴割米が多く見られたことや、いもち病が多く見られた地域があったことなども影響していると考えている。

１等米比率が低い要因は、登熟期間の高温が間違いなく影響している。また、早期栽培では、梅雨を明けてすぐに実るため、日照時間が短いことも１等米比率の低下に影響している。このように、単に高温だけでなく、日照時間とのバランスも影響がある。さらに、コシヒカリやヒノヒカリのように病気には強くない品種が多く栽培されていることも品質が低下している要因かと思う。

そのため、単に高温に強いだけでなく、日照時間が短くても耐えられる、病気にも強い品種の育成に取り組む。

（担い手の確保について）

（島村部会員）

・農業担い手支援課の方に協力いただき、高知大学農林海洋科学部の２回生 150 人に対して、就業支援に関する授業をここ３年間実施している。農業イノベーション推進課にも IoP の利用に関する実例についてお話いただいている。講義の後、就農したいかアンケートをとると５～６名くらい本気で考えている学生がいる。実際、本学の卒業生の就農状況をみると１、２名。今、IoP が浸透してきたこともあり、農業そのものに興味をもつ学生がいる。そこで、実際の就農に結びつけるためには、企業への就職活動が始まる３回生以降にも、県からの積極的なアプローチがあるとよい。

（政岡農業担い手支援課長）

・IoP について学んでいただいた学生さんが就農するのは、県としても非常に心強い。しかし、ハウスが高額になっていることから、20 代の方が就農するにあたっては、まず農業法人に就職をし、そこで技術を学び、資金を貯めるという方向性を検討していただければと思う。

３回生以降へのアプローチについては、ぜひお願いしたいところ。お声がけいただければいつでも行きたいし、農業法人の就職相談会も実施していくので、その案内もさせていただく。

（SAWACHI の利用促進について）

（山﨑部会員）

・私は SAWACHI を 1 日に何回もみており、使いたい機能がないという意見があることに驚いている。農家も(SAWACHI について)理解度にかなり差があるため、各部会や JA の関係者単位で勉強会などを実施してはどうか。協力できることがあればしていく。

（平田農業イノベーション推進課長）

・山﨑部会員のように SAWACHI を使っていただいている方の活用事例を利用されていない方にしっかりと伝えていくことを県と JA でやっていく。30 代、40 代の人にはほぼ 100%使ってもらえるよう取り組んでいくので、また協力をお願いしたい。

（水田農業の振興について）

（山﨑部会員）

・私も水田の農家だが、少ない人数で広い面積ができるのはやはり水田栽培だと思うので、水田農業の振興はお願いしたい。

（濵村農業政策課長）

・本県においても県内の作付面積の中で半数以上が水田を占めるということで、水田農業の振興は重要な課題であると認識。

（農産物の価格に対する消費者の理解醸成について）

（山﨑部会員）

・流通・販売の支援強化で、消費者へ野菜価格が高くなっても理解してもらうえるよう、資材代など細かい数字を示していかないといけない。

（久永農産物マーケティング戦略課長）

・フェアプライスについては、しっかりと取り組んでいかなければならない。掲示しているポスターにある「味の決め手は高知産。」のキャッチフレーズや先日公開した動画の活用などにより消費者理解のための取組を進めていく。

（香酸柑橘の生産拡大と支援について）

（前田部会員）

・卸売や小売り等のバイヤーに、柑橘、特に仏手柑や直七などの香酸柑橘の人気が高いが生産量が足りていない。生産拡大が必要だと思うが、その生産現場の現状と県

の支援について聞きたい。

（平田農業イノベーション推進課長）

・ユズを始め、香酸柑橘は需要が高く供給できていない状況。直七やユズなどの柑橘では、地元に産地協議会を作り国の事業を活用して、新植や改植を支援している。また、園地についても、傾斜地ではなく水田の平坦地で栽培し、長く作り続けられるよう支援を進めていく。

（地鶏のブランド展開について）

（前田部会員）

・地鶏のブランド化が重要と考えるが、生産者と加工業者、そして流通に一体感がないことを危惧している。それらがクラスター的に結びつけば、よりブランド展開できるのではないかと思っている。現在の生産現場の状況と地鶏のブランド化に向けた取り組みは、どうなっているのか。

（谷本畜産振興監）

・土佐ジローについては、卵と肉利用ができる地鶏だが、メインは卵。これまで、中山間で小規模の高齢者が希少性を売りに儲けていたので、規模拡大には対応できていなかったが、流通業者と連携して一元的に卵を集荷し、大口需要に応えられるような体制づくりを進めているところ。一方、はちきん地鶏は増産体制が整っているため、生産地である大川村や産業振興推進部と連携しながら、出口を広げているところ。

（高知県産青果物のブランディングについて）

（彼末部会員）

・高知県民にとっては当たり前の高知の青果物のおいしさは県外の方から気づかされる。（今年度プロモーションを始めた）「味の決め手は高知産。」のキャッチフレーズを活かして、ぜひ高知産のブランディングをお願いしたい。